

The Knot

本冊子では紹介しきれなかった教員がまだまだいます。
ぜひ公式ウェブサイトの特集ページもご覧ください。



上智大学 The Knot Search



The screenshot shows the 'The Knot - 知の結節点' feature page. The top navigation bar includes 'Academics', 'Research', 'Computable', 'Admissions & Art', 'About', and 'For Current Students'. Below the navigation is a search bar. The main content area features a large title 'The Knot - 知の結節点' with a small circular icon. To the left is a sidebar with 'ARTICLES Features' (including 'Sophia Style', 'Learning of Experts', 'Relation to the World', 'The Knot Research Group', '上智大学の研究', and 'Sophia Division since 1943'), 'News', 'Events', and a 'キーワードから探す' section. The right side displays a grid of nine articles, each with a thumbnail image and a brief description. At the bottom of the page is a footer with links to 'The Knot Research Group', 'The Knot News', 'The Knot Events', and 'The Knot Library'.

<https://www.sophia.ac.jp/jpn/article/feature/the-knot/>



上智大学
SOPHIA UNIVERSITY



知の結節点

気候危機、紛争と暴力、IT技術による急速な変化など、私たちが直面する地球規模の諸課題と解決策をつなぐ上智大学の研究者たち。上智の叡智の源であり、世界とつながる「結び目」である彼らの研究に迫ります。

令和の日本に
イエスがいたら——。
現代的な視点で
キリスト教を読み解く

インターネット
や仮想空間で、
日本の知的
財産権はどこまで
行使できるのか

現実を見つめ、
地域社会の
影響を模索する
与えうる

次世代太陽電池や自然に還る高分子材料
など、新素材の研究で未来に貢献する

消費者の感覚に
訴える新しい視点。
感覚マーケティングが導く
エシカルな選択

人種差別を個人の問題
と捉えるのではなく、
社会構造から
アプローチする

「かわいそうな
人たち」か。
中東の女性は
多角的な視点で
ジェンダーを考える

“哲学の力”で社会は動く。
学術的な哲学研究と
市民の哲学のつなぎ役に

令和の日本にイエスがいたら——。
現代的な視点でキリスト教を読み解く



神学部神学科 教授

原 敬子



CHECK▶

神学部の原敬子教授は宣教学を専門とする研究者です。信仰を広める役割を担う宣教師らへのインタビューなどを通じて、現代を生きる私たちにキリスト教は何をもたらしているのかを深く掘り下げています。

この一冊



『 Chernobyl's Prayer 』
(スペトラーナ・アレクシエービッチ著 松本妙
子訳 岩波書店)
1986年の原発事故に遭遇した人々に丹念な
取材を重ねて書き上げたノーベル文学賞受賞
作。うっかり電車の中で読んで号泣しました。語る
人と聞く人の共同作業で生み出された本作は、
私に「 インタビューとは何か 」を教えてくれました。

イエス・キリストが生きた時代から約2000年がたっています。イエス自身は何も書き残さなかったのですが、弟子たちがその言葉を文字として残し、続く世代がそれを読み、その時代の言葉で再び書き記してきました。キリスト教はいつだって、その時代に合わせて読み解かれてきました。

つまり神学とは、キリスト教を信仰する人たちが書き残したテキストを学ぶ学問であるとともに、現代的な在り方を研究する学問といえるでしょう。

対話でしか伝わらない思い。インタビューから知る 「現代の信仰」

私の専門である宣教学は、キリスト教のプロパガンダについて研究する学問です。その調査研究手法として、私は現代を生きるキリスト教の信仰者や宣教師、50人ほどにインタビューを行いました。インタビューは相手の話を聞くという行為ですが、その過程で聞くことそのものが非常に神学的な行為であると気づかされました。

一人の人の信仰の歩みを聞くことは、すでに存在するテキストを研究するのとは違い、個人の内面にある信仰やキリスト教への信念を知ることになります。そして質問する私もまた、現代を生きるカトリックの信仰者です。私が質問し、傾聴し、対話することによって、「現代の人は何を信じているのか」というテキスト化されていない領域に入していくことができるのです。他者の物語を聞き、自分の物語を伝える。この共同作業のなかで膨らんだ物語をまた別の人に伝えていく……宗教とはこうやって広がっていくのだということもまた、実感させられました。

日本国憲法にも通底する、神のもとの平等という思想

宗教は時代によってとんでもなく変化します。価値観も変わります。私は中世に起きた十字軍の遠征を「ありえない暴挙だ!」と思いますし、16世紀の宗教改革の場にタイムスリップしたら、プロテスタントを立ち上げたルターと一緒に、ローマ・カトリック教会を批判したはずです。

神学は、古来の宗教觀をそのまま信じて次に伝えることではありません。今イエスが生きていたらどうするだろうと考え、現代を生きる人の仲立ちになることこそ、神学研究者の仕事なのです。

たとえば、憲法に示されている生存権や基本的人権の尊重の根拠になっているのが、キリスト教の「神のもとの平等」という考え方です。神に愛されるという意味で、人はすべて平等なのだと、イエスは2000年前に伝えています。それが、現代の法にも形を変えて取り入れられているのです。

法だけではありません。私たちの生活のなかにはジェンダー、生まれ育ち、仕事、国籍、人種など、さまざまな壁があります。このような社会の壁も、キリスト教のヒューマニズムによって突破できるはずです。それは信仰の有無とは無関係に、現代人にとっても心の土台になるのではないかでしょうか。

2000年前、國も権力も敵味方も超えて、神のもとで平等だと唱えたイエス。彼のアーネーともいえる魅力的な思想に、人々が出会いきっかけを作りたい。それが今の私の願いです。

※この記事の内容は、2022年9月時点のものです

“哲学の力”で社会は動く。 学術的な哲学研究と市民の哲学のつなぎ役に



文学部哲学科 教授
寺田 俊郎

実践哲学が専門の文学部の寺田俊郎教授。カントの実践哲学をはじめ近現代の実践哲学を研究する傍ら、「哲学カフェ」など市民とともに哲学を実践する活動も行っています。学術的な哲学研究の難しさと面白さ、哲学が持つ力について語ります。



CHECK▶

18世紀のドイツの哲学者、イマヌエル・カントは、人間と世界をめぐるありとあらゆる事柄を哲学的に考えましたが、道徳や政治、法など人間の行為に関わる哲学でも多くの業績を残しました。人間の行為に関わる哲学を「実践哲学」と呼びます。私はこの実践哲学を研究しています。カントは「人間は理性を持っているかぎり、国境を越えて行動し、言論し、考えることができる」という「世界市民主義」を提唱しています。この「世界市民主義」も私が近年特に力を入れている研究テーマです。グローバル化の進む現代では、いたって当たり前のことのようですが、カントは18世紀の時点すでにそうした先進的な思想を持っていました。

今の世界はカントの世界市民主義的な哲学に大きく影響を受けています。国際連合の理念などもカントの思想につながるもので、哲学的思考は世界に大いに影響を与えますし、今後も与えていくはずです。

哲学を学術的な側面だけでとらえてはいけない

学術的な哲学の研究では基本的に、哲学文献の原典を読んで解釈します。カントの哲学を研究するなら、まずはドイツ語が読めることが必須です。そして、カントに共感あるいは疑問を抱きながら、カントと対話をしながら読んでいく。これまでさまざまな研究者が続けてきた緻密な解釈の経緯も理解しつつ、新たに問い合わせていく必要があります。いずれも易しいことではありませんが、自分独自の読み方ができるようになると、研究も楽しくなってきます。ただ、哲学を学術的な側面だけでとらえてはいけないとも思っています。カントは学術的な哲学を「学校概念の哲学」、その対比として、理性を持つ人間が関心を持たずにいられないことを哲学的に考えることを「世界概念の哲学」としました。カントは、この世界概念の哲学こそが眞の哲学だと述べ、私もこの考え方方に大いに共感しています。実際、世界には環境問題、人権問題、戦争と平和の問題、貧困の問題など、関心を持たずにいられないさまざまな問題があふれています。一般の方々がそれらを哲学的に考察すること、それこそが社会を動かす一つの力になるはずだと考えています。

哲学的対話のなかでは誰もが自由で平等になる

近年は哲学カフェや、小学校、高校などの教育現場、企業などに学生たちとともに出向いて、哲学を専門としない人々と一緒に哲学的に考えるという活動もしています。哲学的な対話の方法、哲学的な対話をするときの進め方、その難しさと克服方法、人々がどう変容するか。それは、私の学術的な研究活動の一環でもあります。哲学的な対話の場では、「幸福とは何か」「自由であることはよいことか」「善悪は普遍的か」など、日ごろ当たり前に思って見過ごしている素朴な問いを拾い上げて、共に考えることができる。哲学的な問いは誰もが意見を持ちながら、誰も最終的な答えを知りません。先生に訊いても親に尋ねても百科事典を見ても、Googleで調べても分からず。同じような問い合わせている人たちと一緒に対話するしかありません。哲学的な対話の場では、誰もが自由で平等な関係性を築くことができます。おとなも子どもも自律的に、そして対話的に考える。まさに究極のアクティブラーニングです。「哲学的である」とは、その正解を探ることではなく、「考えることそのもの」。哲学的に考えることに意味があることを知り、哲学的に考える方法を知ることこそ重要です。それができれば、社会の多様な問題を考えるときの基礎になります。そして将来、どんな職業に就いても必ず役に立つ。私が心がけていることは、「学術的な哲学の研究と市民としての哲学をつなぐこと」。それが今の目標です。



『永遠平和のために』
(カント／著 宇都宮芳明／訳 岩波文庫)
カントの実践哲学の総決算であり、最初に読む哲学の本としておすすめです。「戦争と平和」について論じており、今、読むべき本でもあります。最初から納得のいく理解ができないでも、数年後に読み返してみてほしい。哲学の本とはそういうものです。

※この記事の内容は、2022年5月時点のものです

紛争後の教育現場に 「人はなぜ学ぶのか」の答えを見出す



総合人間科学部教育学科 教授
小松 太郎

ボスニア・ヘルツェゴビナ、ヨルダン、アフガニスタン、東ティモールなどの紛争影響国で、教育の場を取り戻す活動を続ける総合人間科学部の小松太郎教授。その過程で見た、平和を維持する教育の形や学びの眞の意義とは?



CHECK▶



『アイデンティティと暴力』
(アマルティア・セン／著 大門毅／編集 東郷えりか／訳 劍幸書房)
戦争や対立といった危機の際、何が一番重要なか。ノーベル経済学賞を受賞している著者は「選択肢だ」と説きます。自分のアイデンティティは自分で決め、ときには複数持つことも可能、大切なことは選択する自由だと教えてくれます。

21世紀の戦争の多くは民族間紛争です。紛争後も、対立していた民族が同じ国で暮らし続けることが多く、再び武力衝突が起こる可能性があります。平和を維持し、憎悪を次世代に引き継がないために教育が果たせる役割は何か、これが私の研究テーマの一つです。

南東欧に位置するボスニア・ヘルツェゴビナという国の例でお話ししましょう。この地では1990年代に大きな紛争があり、クロアチア系(カトリック)、セルビア系(正教)、ボシュニアク系(イスラム教)という異なる宗教の三つの民族が戦いました。紛争後も、国内の地域によって力を持つ民族が異なり、学校ではその地域の多数派勢力の視点に立った教育が行われています。しかし、学校には地域社会の多様な民族の児童が通っています。現場の教師はどんな配慮をしているのでしょうか。

歴史教育では一つの正解を求めず、異なる解釈を共有し合う

ある先生は、歴史の教科書を生徒に自由に選ばせています。クロアチア系の視点で書かれた教科書を使う子もいれば、ボシュニアク系の教科書を使う子もいる。書き手の視点が違うので内容も違います。授業では「どっちが正しいか」ではなく「何が書かれているか」を共有し、解釈が異なる理由と共に考えるのです。

単一民族の子だけが通う学校では、生徒も教師も凝り固まった考え方を持つ可能性があります。そこで学校と現地の市民組織が協力し、異なる民族の学校との交流や活動の場を設けています。これは公教育ではないため放課後に実施されますが、市民組織が積極的に校長先生に働きかけているケースが多いようです。

先生方も紛争で心や体に傷を負っている人が少なくありません。それでも希望を失わず、次の世代に憎しみを継承させない教育をしようと、現場レベルで奮闘する姿に私も大いに刺激を受けています。

最低限の衣食住を手に入れたら、次の希望は「学びたい!」

私にはもう一つ研究テーマがあります。それは「紛争の影響を受けた社会で、人はなぜ意欲をもって学ぼうとするのか」というもので、難民へのインタビュー調査などを行っています。

人道支援と聞いて真っ先に思い浮かぶのは、食糧や衣服、住む場所などです。ところが、難民キャンプで「何が必要?」と聞くと「教育」と答える人は非常に多く、親はもちろん子どもたちもそうなのです。日本の子どもにも「なぜ学校に行きたいの?」と聞くと「友だちと遊びたい」と答える子が多いのですが、難民の子は「勉強がしたいから」と答えます。

紛争で十分な教育を受けられなかった東ティモールの若者たちに、「なぜ再度教育を受けたいと思ったのか」と聞いたときも同じでした。私は「教育を受けることで仕事に就きたい」という答えを予想したのですが、「学びたい」「知らないことを知りたい」と答える人が多いのです。学びというものは、人間の本質的な欲求なのだと実感させられます。

翻って日本の教育政策は、まだまだ子ども主体とは言えません。「教科書に書かれたことは正しい」「教育は学校で受けるもの」という一元的な考え方の転換や、多文化共生社会での学びを模索するとき、紛争後社会での新しい取り組みから学ぶことは多いはずです。

※この記事の内容は、2023年10月時点のものです



インターネットや仮想空間で、 日本の知的財産権はどこまで行使できるのか



法学部国際関係法学科 教授
駒田 泰士

CHECK▶



人間が生み出した知的創造物や商標などを「知的財産」と呼びます。グローバル化、デジタル化によって急激に変容する社会の中で、知的財産をどのように守っていくのか。法学部の駒田泰士教授が解説します。

この一冊



『国際工業所有権法の研究』
(木棚照一／著 日本評論社)
大学院生のころ、国際私法の研究をしつつ知的財産権を専門にしようと決意しました。しかし属地主義という概念の平板さに息が詰まりかけ、頓挫しそうになったときに出会ったのがこの本です。私の考え方の土台となり、道を開いてくれた一冊です。

私が専門とするのは知的財産法です。といっても、知的財産法という名前の法律があるわけではなく、特許法や著作権法、商標法といった知的財産を保護するための法律全般を指します。憲法や民法などに比べると、知的財産法は変化の激しい分野といえるでしょう。技術革新や新しい文化現象が起こるたびに、法律やその解釈のアップデートが迫られるからです。

特許権の属地主義は、現代的な問題に対応できるのか

たとえば最近の研究では、インターネットを使った発明に関する特許権侵害の問題を扱いました。特許権とは、発明を保護するための権利で、国ごとに取得しなければなりません。そして、それを行えるのは特許を取得した国のかなだけです。もしA社が有する日本の特許に係る製品を、B社が国内で勝手に製造販売すれば侵害になりますが、B社が海外で製造販売すれば侵害にはなりません。これを「属地主義の原則」と言います。ところが近年では、A社が日本で取得した特許に係るネットサービスにそっくりなものを、B社が日本のユーザー相手に提供する、という事例がしばしばされるようになりました。常識的に考えれば、侵害といいたいところですが、B社が「そのシステムに必要なサーバーはアメリカのものを使用している。だから日本の特許権の侵害にはならない」と主張した場合はどうでしょうか。属地主義がそのまま適用されると、「B社はおとがめなし」という結論が導かれてしまします。有名なものは、ニコニコ動画(ニコ動)の特許裁判です。画面上をコメントが流れる機能はニコ動を運営する企業の特許なのですが、そのシステムを模倣した企業のサーバーがアメリカにあったため、東京地方裁判所では侵害とは認められませんでした。しかしながら、2023年の知的財産高等裁判所の大合議判決と2025年の最高裁判所の判決において、属地主義を緩和する解釈が示され、ニコ動は逆転勝訴しています。

時代の変化に即した知的財産法の解釈を求めて

インターネット関連の発明において、属地主義にこだわるのは無意味だと私は考えています。サーバーはどこの国にでも置けます。属地主義からは卒業して、ユーザーがもっとも多い場所の知的財産法に従うよう変わっていくべき時期でしょう。

ほかにも最近では、こんな問題がありました。インターネット上の仮想空間(メタバース)において、有名ブランドそっくりのデジタル・バッグが販売された場合、リアルな社会での商標権行使できるのか。ある歌手の声によく似た声をAI(人工知能)に合成させて、メタバース内でアバターに歌わせた場合、その歌手の権利は侵害されたと言えるのか。多くの国の知的財産法は現実空間における知的財産だけをイメージして作られており、このような新しい問題に直接対応する仕組みがありません。

知的財産法は今、従来の概念から新しい概念に移行すべき時期になっています。しかしそれは簡単なことではありません。数学と違い、法律に絶対的な正解は存在しないからです。結果的に多くの人が正しいと信じたとき、それは正しい法律になります。法学が「説得の学問」と言われるゆえんでしょう。時代に即し、多くの人を説得できる解釈を導き出すことが知的財産法の研究者には求められているのです。

*この記事の内容は、2023年8月時点のものです。その後2025年3月に一部内容の更新があり、最新の情報が反映されています。



消費者の感覚に訴える新しい視点。 感覚マーケティングが導くエシカルな選択



経済学部経営学科 准教授
外川 拓

CHECK▶



マーケティング戦略や消費者行動論が専門の経済学部の外川拓准教授は、人の五感に訴えかける「感覚マーケティング」について研究しています。消費者にエシカルな選択を促す、SDGsの視点も踏まえた新時代のマーケティングとは?

この一冊



『研究者という職業』
(林周二／著 東京図書)
一度しか読まない本もあれば、何度も読み返しがくなる本もあります。私にとってこの本は、間違いなく後者。研究者の生き方、心構えがアリティのある語り口で書かれていて、読むたびに背筋が伸びる思いがします。

ある人が街を歩いている途中、カフェに入りコーヒーを買い求めた——そんな場面を想像してみてください。その人はなぜ、そのカフェでコーヒーを買ったのでしょうか?もしかすると、カフェから漂ってきたコーヒーの香りに誘われたのかもしれません。しかし、カフェのおしゃれな内装に惹かれ、一息入れたくなつたのかもしれません。「コーヒーを買う」という行動は同じでも、その背後にある理由はさまざまなのです。

私が研究しているのは、人間の視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚、いわゆる五感への訴求が「何かを買う」という行動に与える影響です。内容的にはマーケティング研究にあたり、五感に訴えかけるマーケティングという意味で「感覚マーケティング」と呼ばれることもあります。先ほどのコーヒーの例を感覚マーケティングの視点から分析すれば、コーヒーの香りが嗅覚に訴えかけたこと、おしゃれなインテリアが視覚に訴えかけたことがコーヒーの購入につながった、と考えることができます。

パッケージデザインで変わる消費者の行動

最近は、五感の経験が与える「無自覺的な効果」にも注目しています。無自覺的な効果というのは、意識的に何かを行おうとするのではなく、消費者自身も気づかず判断や行動が変化することを指します。海外の研究者が行った有名な実験では、製品写真が上の方に配置されたパッケージよりも、下の方に配置されたパッケージの方が「重そう」という印象を与えることが明らかになっています。実際に持ってみて「重い」と判断するのではなく、パッケージを見ただけで無意識のうちに「重そうだ」と感じるのであります。さらに私が行った実験では、製品写真が下の方に配置されたお菓子のパッケージは、味の「重さ」、つまり濃厚感を高める傾向があること、その結果、食べる量が減少することも分かりました。これも無自覺的な効果です。商品開発に携わる企業の人たちは、以前からこういったことを経験的に理解し、パッケージデザインや広告制作にいかしてきました。私たち研究者の役割は、現場の経験則や知恵のなかから原理原則を見つけ出し、科学的な方法で検証すること、そしてより多くの人たちがその知見を使える形にして提供することだと思っています。

人や社会にとって「良い選択」を促す仕掛けを作りたい

マーケティングとは、消費者に対して効果的に製品の魅力を伝え、購入し、満足してもらうための活動だと長年考えられてきました。近年はこれにSDGsの視点なども加わり、マーケティングの担う役割も変化しています。これからマーケティングが目指すのは、製品の購入や消費を行う際、人や社会に配慮した選択、よりエシカルな選択を消費者に促す仕組みを作ることです。これまでの調査や研究によると、「世の中にとって良い製品であることを、頭でわかっているが、買うという行動に移せない」という消費者が多いといわれています。消費者に行動を躊躇させる要因は、品質への懸念、価格に対する抵抗感などさまざまでしょう。ネガティブな連想や不安といった障壁をどのようにしたら乗り越えられるか。こうした点を考える際、消費者の感覚を通じて行動変容を促す感覚マーケティングの研究は、今後も一層役立つと考えています。

*この記事の内容は、2023年8月時点のものです。

VI.

人種差別を個人の問題と捉えるのではなく、
社会構造からアプローチする



外国語学部英語学科 教授

坂下 史子

CHECK▶



アフリカ系アメリカ人の歴史と文化を研究する外国語学部の坂下史子教授。なかでも20世紀以降に頻発した人種暴力や、その原因となる社会構造上の問題に光を当て、現代にどう継承されてきたのかに関心を寄せています。

この一冊



『ちびくろさんぽ』
(ヘレン・バンナーマン／著 フランク・トビアス／絵 岩波書店)
差別的であるとされ1988年に絶版になった本です(2005年復刊)。幼い頃トラがバターになるという奇想天外な物語が大好きだった私は、直前にあわてて買いました。差別に無自覚だった当時の行動は、人種差別の研究者となつた私の原点とも言えます。

※この記事の内容は、2024年5月時点のものです

VIII.

中東の女性は「かわいそうな人たち」か。
多角的な視点でジェンダーを考える



総合グローバル学部
総合グローバル学科 教授

CHECK▶



辻上 奈美江

サウジアラビアを中心にフィールドワークを重ねながら、中東の女性たちのジェンダー問題を研究する総合グローバル学部の辻上奈美江教授。西洋的な視点に偏りがちなジェンダー論に、独自の視点で切り込みます。

この一冊



『言葉と物 一人文科学の考古学』
(ミシェル・フーコー著 渡辺一民・佐々木明／訳 新潮社)
私たちの価値観の多くは西洋近代に生まれたもので、不变の真理ではないことをこの本が教えてくれました。男女の性的役割も同じです。「人間によってつくられたものは、その根底から疑ってみると」そんな習慣が身につきました。

ジェンダーとは、生まれながらの性別ではなく、社会的・文化的に作られた性的役割のことです。私はサウジアラビアを中心に、さまざまな角度から男女間の権力関係について調査・研究を続けています。

サウジアラビアを、女性が虐げられている国と思っている人も多いでしょう。一夫多妻制が残り、家父長制的な要素も強い。数年前まで女性の自動車運転も認められていませんでした。世界経済フォーラムによる「グローバル・ジェンダー・ギャップ指数」は146カ国中127位(2022年)です。そんなサウジアラビアにおいて、女性は抑圧された存在であり「かわいそうな人たち」なのでしょうか。

欧米的な差別の価値観をはずし、女性ネットワークから現実を見る

日本での中東のジェンダー研究は歴史が浅く、私が研究を始めた20年ほど前はアラブ地域のジェンダー研究者はごく少数でした。正しい情報が伝わらないと誤解が生まれがちです。私自身も、アラブの女性たちは自由を制限された気の毒な人たちだと思っていました。しかし、私が現地で出会った女性たちは、少しも「かわいそうな人たち」ではなかったのです。

まず驚いたのは、女性ネットワークの豊かさです。暑さを避けた夜9時ごろから女子会が始まります。実家や親戚、友人の家に集まって食事やおしゃべりを楽しみ、帰宅するのは日付をまたぐものも当たり前。未婚の女性には許されていませんが、既婚女性の自由さは日本人以上だと感じました。

外出時にはヴェールをかぶり、アバヤと呼ばれるロング丈の黒い上着を着るのですが、女子会ではその下のおしゃれを自由に楽しめます。欧米視点では抑圧の象徴とされるヴェールやアバヤも、現地の女性たちは「アバヤがあるから信仰を守りながら仕事ができる」「アバヤが一枚あれば公式な場で通用するので便利」と好意的な声も聞きます。

近年は起業する女性が増え、そこには女性ネットワークの果たす役割も大きいようです。女性が収入を得て家庭の経済に貢献するようになると、男女の権力関係にも変化が生まれる可能性もあるでしょう。

異なる文化への無理解が、自分の中に存在することに気づいて

もちろん婚姻関係の問題など男女間の不平等があるのは確かです。だからといって西欧的ジェンダー論というレンズだけを通して、良い・悪いを決めていいのでしょうか。

私は可能な限り現地の人の声に耳を傾けることに重点を置いてきました。扱うトピックも宗教、労働、消費、運転、おしゃれなどさまざままで、成果は研究論文としてだけでなく、雑誌や一般書籍でも発表しています。それは中東のジェンダーに関する誤解に気づくことで、私たちの中に存在する権力性にも気づいてほしいからです。一方的に「かわいそうな人たち」と見ることも、差別的な行為の一つです。

日本も先進国でありながら、前述のランキングでは116位。政治・経済分野における男女格差は、日本においても解消すべき重要なテーマです。その改善方法は欧米的ジェンダー論にのみ求められるとは限りません。私の研究もその題材の一つになるとと考えています。

※この記事の内容は、2022年6月時点のものです

VIII.

地域社会の現実を見つめ、 与えうる影響を模索する

私は東京近郊の食文化に注目し、地域社会がいかにして小規模事業者のコミュニティを支え、また小規模事業者がどのようにその地域を創り上げているのかについて研究しています。研究対象としているのは、私の住まいに近い、東京都杉並区の西荻窪です。研究は、人々へのインタビューを通じて理解を深めるエスノグラフィック・フィールドワークを主体としています。これは一種の質的研究であり、数字で仮説を証明する量的研究とは対照的に、知り得た情報を自問し、分析する姿勢が必要です。社会学者は、自分の考えや聞いた話に対して常に懐疑的な姿勢を持たねばなりません。そして変わりゆく現実に自分の考えをアップデートさせるため、話を聞かせてくれる人々に常にアプローチすることが必要です。

現実とは、地域社会に生きる人から学ぶもの

西荻窪界隈での研究の一例を挙げると、新型コロナウイルス感染症がもたらした小規模事業者への影響、それもたった1人が運営する小さな飲食店のような商売への影響は、予想していたほど壊滅的なものではなかったことが分かりました。このような小規模事業者は、行政の資金援助やテイクアウト注文による収益により生き残ることができましたが、一方で、通勤客を相手とする市の中心部の大規模事業者は、脅威にさらされていました。また、結婚式や観光など特定のイベントや分野に大きく依存する中小企業や、高齢化などの問題に既に悩まされてきた事業者なども、大きな打撃を受けました。研究のインタビューを行うために訪れたお店には、廃業に追い込まれたところもありました。例えば高齢のオーナーが営む50年の歴史を持つ喫茶店や、近所の人たちが大きなイベントを行う際に使われていたフレンチレストランです。どちらもパンデミックがなければ、もっと長く事業継続ができたはずです。社会の高齢化や老舗事業者の廃業の結果、建て替えや再開発が行われ、地域社会の特性に影響が出ています。ビジネスの主体が個人から企業に移行することで、コミュニティの特性が破壊され、人と地域社会のつながりに変化が生じているのです。何年もかけて職人が技術を磨いてきた場所が失われることもあります。一方で、新しい職人が生まれることもあります。事実、YouTubeで技術を学ぶ新しい職人も登場しています。また、匠の文化に加わる女性も増えています。私たちは、現実の理解をアップデートするために、このような変化を学ぶべく、人々との対話を試みています。

地域社会とのつながりを構築し、影響力を得る

私は、西荻町学と名付けたパリックエスノグラフィーのウェブサイト「Nishiogiology.org」を運営しています。ここでは、西荻窪における私の研究内容を英語・日本語で発信し、インタビューを行った人々を含め、研究にかかわったすべての人にシェアしています。そうすることで、地域社会により大きな影響を与える可能性が高くなるからです。メディアに注目されることのないような小規模事業者の様子を記録し、概要や写真を紹介するだけでなく、そのビジネスの複雑な現実を伝えています。このサイトは2023年3月に文化庁から「食文化『知の活用』振興事例」に認定されました。このような活動は、時間とともに変化する地域社会のニーズや価値観を、政策立案者に知らしめることも可能とします。50年前であれば、家族経営の事業は現在に比べ持続しやすく、その多くが家族で働いて生活するだけの余裕を持つことができました。しかし、現在の小規模事業者はワークライフバランスを意識するようになっており、上の世代が考えたこともないようなことが、今後起るかもしれません。このような問題提起にとどまらず、地域の再開発がコミュニティにどのような影響を与えるかといった問い合わせ、私の研究を通じて投げかけることが可能でしょう。社会に影響をもたらす研究をすること。これは、私が地域社会に焦点を当てることを決意した動機のひとつです。私は中国上海で長年セクシュアリティや若者文化などさまざまなテーマを研究してきましたが、外国人研究者として社会に影響を与えるには至りませんでした。今後の研究活動では、世界各地で同じテーマに取り組む研究者たちとともに、近隣の食文化に関する本を発行したいと考えています。どのような地域社会があるかを知り、その共通点や相違点を見出し、地域社会とそこに暮らす人々をつなげることを目指しています。

国際教養学部国際教養学科 教授

▶

CHECK



東京近郊の食に着目して社会学的なアプローチで研究に取り組む国際教養学部のジェームズ・ファーラー教授。小規模事業者、消費者、コミュニティの関係性、民族誌学的なフィールドワークによって調査し、地域社会の持続可能性を脅かす要因を明らかにすることで、地域社会の発展を後押ししています。

この一冊



『Talk of Love(愛の話)』
(アン・スウェイラー／著、シカゴ大学出版局)
愛というひとつの概念に関して、一人の人間が複数の考え方を持ち、それらを矛盾したまま、しかし効果的に使えるのはなぜか。この本はそれを説明しています。これを知ることは、文化とは何か、なぜ文化は複雑で柔軟なのか、そして、皆が信じる「共通の愛」が存在しないように、「共通の文化」は存在しないのだということを認識する上で大切です。

※この記事の内容は、2022年7月時点のものです

IX.

次世代太陽電池や自然に還る高分子材料など、新素材の研究で未来に貢献する

近年、ノーベル化学賞の候補として「ペロブスカイト太陽電池」が注目されています。ペロブスカイトとは、 AB_3 の組成で表される結晶構造を持つ物質の総称であり、太陽電池に用いられるのは金属ハロゲン化物です。軽く、加工しやすい特長を持ちます。

ペロブスカイト太陽電池の発電効率はすでに25%を超え、実用化は間近とされていますが、まだ耐久性や安定性は十分ではありません。この太陽電池の素材であるペロブスカイト化合物の長寿命化や多様化の研究をしています。

次世代太陽電池として期待される夢の材料

私がペロブスカイト化合物に出会ったのは、1998年に遡ります。上智大学の讃井浩平名誉教授をリーダーとする共同研究プロジェクトに参加したのがきっかけでした。現在、ノーベル化学賞候補として注目されている桐蔭横浜大学の宮坂力特任教授が論文を発表されたのは2009年ですから、10年も前のことになります。

実は研究を始めた当初、私はこの材料が太陽電池に応用できることに気づいていませんでした。低次元のペロブスカイト化合物を使って量子閉じ込めに特有の現象を確かめる研究をしていたため、太陽電池に使われる三次元の構造には着目していませんでした。

とはいっても、共同研究プロジェクトの上智大学のメンバーだった手嶋健次郎博士が、太陽電池の専門家である宮坂先生とペロブスカイト化合物の出会いのきっかけとなりました。つまりペロブスカイト太陽電池には上智大学の研究が大きく関わっています。

この素材が画期的なのは、モノの表面に印刷や塗装のように「塗る」ことができる。現状のシリコンや有機薄膜を使った太陽電池では、プラスの電荷を取り出す半導体(p型)とマイナスの電荷を取り出す半導体(n型)の二種類を組み合わせる必要がありますが、ペロブスカイトは両方の電荷をそれぞれの電極に導く特性(両極性伝導)を備えるため、簡単に作れるのも大きなメリットです。

製造過程でCO₂の排出量を大幅に抑えられるのも魅力です。近い将来、ペットボトルにペロブスカイト太陽電池を貼って、ピクニックをしながら発電する、なんてこともできるようになるかもしれません。

理工学部物質生命理工学科 教授

▶

CHECK



材料開発を専門とする理工学部の竹岡裕子教授。ノーベル化学賞候補として注目されるペロブスカイト太陽電池の素材開発や、自然に還る生分解性高分子の研究など、未来に役立つ素材の基礎研究について語ります。

この一冊



『木のいのち木のこころ(天・地・人)』
(西岡常一、小川三夫、塩野米松／著 新潮文庫)
法隆寺金堂再建などで知られる宮大工の西岡常一さんとお弟子さんの語りによる本です。数世代先を見据えた仕事の仕方と心持ちに圧倒されました。将来に目を向け、木を育み、その特性を活かす様は、研究や教育にも通じます。

※この記事の内容は、2022年6月時点のものです